町小だより

令和７年
１１月２７日
Ｎｏ．７０２
御免町小学校

45 分の授業に込められた思い

校　長　　土田　利康

先日、自作したおもちゃで遊ぶ２年生の生活科の授業を参観しました。普段はパソコンや Switch などのゲームで遊ぶことが多い子どもたちなのでしょうが、輪ゴムを動力にして、ペットボトルや紙コップなどで作ったおもちゃを飛ばしたり走らせたりする遊びに夢中になっていました。おもちゃや遊び自体を工夫し、目を輝かせて遊ぶ子どもの姿に、ほっこりとした気持ちになりました。

身の回りのすべてのものから学ぶことができるのが、生活科の特徴であり面白さです。２年生の子どもたちは、どうしたら「高く」「遠く」「速く」おもちゃが動くかを「研究」していました。材料を選んだり、組み立て方や投げ方を工夫したりする過程では、よりよくしようと試行錯誤を繰り返します。また、友達と相談したり、記録のよいおもちゃを観察したりすることで、「ゴムの付け方を教えて」とか「穴の位置を変えるとうまくいくよ」という学び合いが生まれます。そして何より、子どもたちが自分の力でできたという達成感や、やればできるという有能感を得ることができます。参観した授業で、今まさに、学校教育で大切にしている「主体的・対話的で深い学び」の具体を見ることができ、担任の取組に感謝の気持ちでいっぱいになりました。

このような授業を成立させるためには、教師の丁寧な環境づくりや子どもへの支援の工夫、子ども一人一人の個性などをしっかりと考えた授業準備・教材研究が欠かせません。今回の授業では、まず子どもが自由に発想できるように様々な材料を吟味して提示し、「どれを使ってもいいよ」と選択を保障しました。また、完成例を示し過ぎず、ヒントとなる最小限の手掛かりだけを示すことで、子どもの試行錯誤を促しました。さらに、困っている子どもにはすぐに答えを与えるのではなく、「どうしたらうまくいきそう」と問い掛けたり上手くいっている友達を紹介したりして、考えるきっかけを作りました。そして、自然に関わるようなグループやルールを考えるとともに、振り返りや発表の時間も設定しました。教師のこうした授業準備・教材研究によって、わずか 45 分の授業の中でも、子どもが生き生きと活動する豊かな学びを実現させることができるのです。

教師が「〇〇は、こういうものだ」「こうした方がよい」と言ってしまうのは、簡単なことです。また、その方が真実は多いのかも知れません。しかし、時間を掛け、子どもの考えを大切にしたとき、そこから湧き出る様々な子どもなりの発見が生まれます。数年前、野菜を育てる低学年の授業を見たとき、教師は「どうすると大きく育つかな？」と子どもに問い掛け、様々な意見が出る中で「たっぷり愛情をかける」と学級の考えをまとめていきました。科学的ではないのでしょうが、生活科の授業としてはすばらしい考えです。

授業の質は、教師が行う緻密な授業準備・教材研究によって支えられています。子ども一人一人の「分かる」「できる」を保障し、安心して学べるように、教師は日々、教材の選択や資料の精査、指導法の工夫などに多くの時間や労力を費やしています。「教員はブラックだ」というような話も耳にしますが、授業に込められた教師の思いも、どこかで話題にしてほしいものです。